

集落営農組織が主体となって取り組んだイノシシの被害対策とその効果

梶 誠吾・小沼 仁美

研究の要旨

2015年には、島根県飯南町長谷地区ではイノシシによる水稻への被害が深刻化していた。そこで、2016年にはそれまで所有者毎に設置・管理していた電気柵を営農組合で一括して設置と管理を行う体制の構築を試みた。電気柵とワイヤーメッシュ柵の設置場所を地図化することによって、管理を容易にした後、電気柵の講習会を実施して組合員の技術向上を図った。2017年には、電気柵の管理目標値を設定して、適正管理していくための意識向上を図った。2018年には、イノシシ1頭にGPS発信器を装着し、行動追跡調査を行って侵入防止柵の効果を検証した。GPS発信器を装着したイノシシは、電気柵を適正に管理した水田へは侵入することはなかった。また、毎年のお米の収穫後には被害対策検討会を開催して、被害発生マップの作成や電気柵の管理目標値の達成状況などを情報共有した。そして、2016年～2018年には、これらの取り組みによって、被害を大きく減少させることができた。さらに、営農組合員の意識にも変化が生じて、隣接地区への波及効果も認めた。

関連図表



図1 長谷地区の防護柵等の設置場所（一部抜粋）

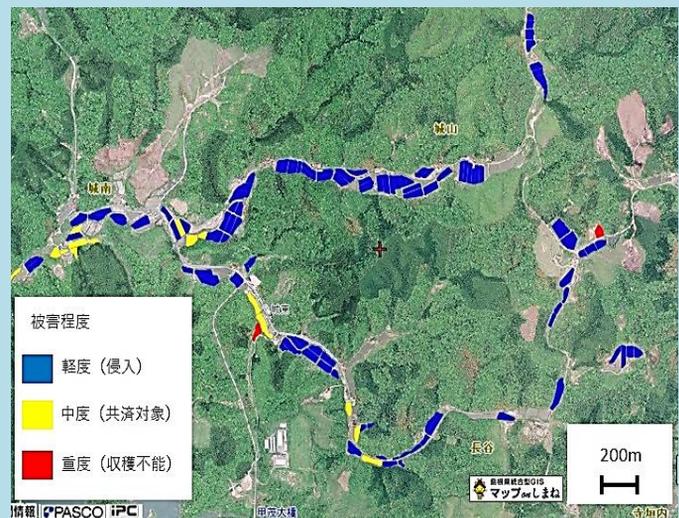


図4 2015年の長谷地区でのイノシシによる被害発生マップ

語句説明

GPS発信器:野生動物の行動を把握するため、人工衛星を利用した位置情報が記録、発信できる装置を備えた機器。